

☆演劇集団「広小路」「すみれ 咲く」講評 (第37回 Kyoto 演劇フェスティバル)

幕が上がると、舞台に三つの空間が横に並んでいます。上手側には食卓と椅子、金魚鉢、ミニ花壇がある空間、中央にはゴミ袋が大量に散乱している空間、下手側にはフラダンスのパウスカートが吊るしてある空間。幕が上がった時はこれは何なんだろうと思いました。登場人物が動き、語り始めると、すぐにこの空間の意味が飲み込めました。小さな共同住宅の上中下階の部屋を横に並べて見せているのです。劇の設定や登場人物の現在の状況がシンプルなセリフと動きで観客に届けられていきます。上の階には家族が住み、父親は現在失業中で金魚や花を育てることに喜びを感じている。母親はそんな夫のことが不満で早く仕事を見つけてほしいと思って少しいらいらしている。二人の間には不登校気味の9歳の少年がいて、この子は学校ではお腹がいたくなるのです。彼らの下の階には大量のゴミをためこんでいる男が住んでいます。これがこの共同住宅の悩みの種（いま話題のゴミ屋敷）です。その下の階には会話から、フラダンスをやっている人が住んでると思われませんが誰も部屋に入ることがなかったので、明るい衣装がだけが妙に印象に残ってしまいました。衣装を手取るシーンがあってもよかったのではないのでしょうか。

自治会の一斉掃除の際に、ゴミ屋敷と化している部屋の住人のことが住宅全体の話題に上り、皆の不安が広がります。誰もこの男については何も知らないのです。追い出せという人、傍観者を決め込む人、問題が起こるまで何も行動を起こさない民生委員など、どの人もゴミ屋敷の住人＝異様な人とレッテルを張り、妄想を広げていきます。その姿は現在の私たちの姿と重なります。

いろいろな状況が登場人物の会話によって、次第に観客に見えてくるのです。、役者さんたちの好演はもちろんです。脚本がよく描かれているからだと思いました。惜しむらくは滑舌です。折角のセリフが発音不明瞭で聴きとりにくいところがあったのが残念でした。

何もしようとしない大人たちと違い、9歳の不登校気味の少年だけが先入観なしに男と向き合います。倒れて動けない男(おっちゃんーゴミ屋敷住人)に声をかけ、部屋まで手を貸して連れて行ってやるのです。おっちゃんが倒れた時に思わず摘んだすみれを、男の子はコップに水を入れて活けてあげます。これは私の思いですが、花は摘まずに植えようとした方がいいのではないのでしょうか。その方がおっちゃんの優しさや男の子の父親との重なりがはっきりしたのではないのでしょうか。男の子はおっちゃんとの会話を通して、彼が足を悪くして働けなくなったこと、人と関わりたくなくなっていることを知り、学校での自分と重ねます。部屋に立てかけてあるギターを教えてもらう約束をしますが、親や近所の住人達は男の子がおっちゃんの家に入出入りすることを禁止します。ある時、おっちゃんがひどい腹痛に襲われ、男の子が父親に急を知らせ、病院へ運びます。それをきっかけに、彼のことが共同住宅の住民たちにもわかり、民生委員が生活保護の手続きをして、おっちゃんは普通に生活ができるようになり、住民とのつながりが生まれていきます。

「言いたいことを劇にする」何て素敵な言葉でしょうか。自分たちの暮らしの中から「劇」をつくっていく皆さんの取り組みを応援しています。(講評者 大原めい)